

## 『葉隠』にみる家庭教育

西 中 研 二\*

### Home education written in HAGAKURE

This paper categorized 1299 sentences written in HAGAKURE and analyzed 210 sentences written about family education.

#### はじめに

田代陣基(1678-1748)が山本常朝(1659-1719)の口述をもとに、『葉隠』を完成させたのは1716年であった。時恰も江戸幕府開闢以来100年を経て、武断政治から文治政治へと移行し、長く続いた戦乱の時代から平和な時代へと名実ともに転換した時であった。

そのためか『葉隠』といえば、「武士道とは、死ぬことと見つけたり」をはじめとして、武士の死生観や忠孝論が余りにも有名であるが、『葉隠』を読み解いていくと、「人事管理論」や「家庭教育論」にも多くの項目を割いている。

表1は、『葉隠』に記載されている1299項目を「武士道」「人事管理」「家庭教育」「幕府配慮」「その他」に分類したものである。これをみると、武士道関連が23%、家庭教育関連が16%、人事管理関連が12%、その他が49%である。なおその他とは、思想的内容のない事柄が記述されている項目のことである。

本稿は、家庭教育関連の項目を「対人関係論」、「子育て論」、「道徳教育論」に分類し検討を加え、現代の家庭教育を考える一助にしようとするものである。

なお本稿に利用した『葉隠』は、和辻哲郎・古川哲史校訂、岩波文庫2013年版であること。聞書

第一の1項を1-1のように表記したことを申し添えておく。

#### 1. 対人関係論

佐賀藩の憲法でもある鍋島直茂の「直茂公御壁書二十一箇条」の第10条に、「人間の一生は、若きに極る。一座の人にもあかれざる様に」と記載されている。すなわち人の一生は、若い時分の嗜みで決まる。それ故、周囲の人から嫌われないようにすべきであると対人関係の重要性を示唆している。そのためか『葉隠』には、礼儀作法を含む対人関係について115項目の記載がある。例えば聞書第一の164に、①簡単な集会にも出席しろ。②愚痴は云うな。③嫌な相手にも挨拶をしろ。④嘘つき、軽薄はよくない。⑤人に悪く思われたまま死ぬのは残念なことであるとある。現代でも十二分に通用する訓戒である。

以下、対人関係論を(1)礼儀作法、(2)言葉使い・話し方、(3)事前準備、(4)悪口、(5)衆の知恵、(6)風体・態度、(7)性格・長所短所、(8)その他に整理して述べてみたい。

##### (1) 礼儀作法

礼儀作法のうち、「先輩・上司への配慮」が多くある。例えば「偉い人・老人の前では、学問・道徳・昔話はしてはいけない」(2-37)、「物事に熟達している人の話は、自分が知っている話でも耳を傾けるべきである」(2-134)、「偉い人との手

\* 筑波大学大学院シニアフェロー

表1 『葉隠』内容分析表

聞書	武士道		人事管理				家庭教育			幕府 配慮	その他	合計
	死生 観等	忠孝論	慈悲論	労務 管理	人材 活用	人材 育成	対人 関係	子育て	道徳 教育			
1	36	32	4	14	0	9	46	4	31	0	27	203
2	24	22	1	8	3	2	35	3	17	0	25	140
3	2	1	1	3	1	2	5	4	4	0	33	56
4	5	7	3	10	4	2	2	5	0	0	44	82
5	1	9	2	13	0	0	2	3	1	3	64	98
6	4	3	0	6	1	1	0	1	0	0	173	189
7	19	11	0	7	3	3	3	0	3	1	20	70
8	16	15	1	7	10	0	8	3	1	1	25	87
9	8	6	0	4	4	0	2	0	1	0	16	41
10	18	11	0	4	0	3	5	0	2	1	120	164
11	35	8	0	6	3	6	7	7	5	1	91	169
合計	168	125	12	82	29	28	115	30	65	7	638	1299
%	23		12				16			0	49	100

注：武士道の「死生観等」には、常住死身（死の覚悟、死に際、死に方等）、武術・武具・兵学（武術兵法などの知識、習得。武術等の稽古。武具等の手入れ、準備、服装等狭義の武士教育）、藩政知識などが含まれている。

合いは、手加減をするように」（7-17、9-7）、「上司から呼ばれたら、食事中でもすぐに駆け参じるように」（7-47）など、わかり易い例から、「板倉周防守の菩提寺である長遠寺住職の月舟和尚が前住職とともに周防守の招待を受けた時、周防守が巻物を取り出し、前住職に読んでくるように頼んだが、前住職は読めないで、それを月舟和尚に読むよう命じた。月舟和尚は、時々わからない振りをして、前住職に確認しながら読み終えた」（10-96）という父・重澄の教訓「知っていて質問するのが礼であり、知らないで質問するのが法である」（11-42）を地で行っている説話までである。

本来の礼儀作法については、「人前では、くしゃみ・欠伸してはならない」（1-17、2-58）、「どんなにお辞儀をしても腰が折れることはない。またどんなに恐惶謹言と書こうが、筆が折れることはない」（1-145）、「人の家を訪問するときは、事前に連絡をしてから行くこと」（2-112）など、現在でも親や上司から言われているようなことが書かれている。

## （2）言葉使い、話し方

これに関連しては、17項目が記載されている。まず「大難の時、お祝いの時、挨拶の時、どんな

時でも一言が大切であるから、心してよく考えて話しなさい」(2-82)と論している。具体的には「不幸に遭って動転している人に、“お気の毒に”などといっけはいけない」(2-56)、「挨拶をする時は、人の気に障らないようによく考えて話すこと」(2-70)、「歌の読み方では、“つゝけ(続け)”から“てには(てにをは)”が大事であるように、常日頃から口のきき方に注意すること」(1-141)、「講義・説法・教訓などのよいことも、言い過ぎると害となる」(2-114)等々の例をあげ、最後には「寡黙がよい」(1-120)、「ものの言い方で一番無難なことは、しゃべらないことである」(11-125)と言い切っている。

鹿児島県串木野の“串木野さのさ”という民謡に「落ちぶれて、袖に涙のかかる時、人の心の、奥ぞしる、朝日を拝む人あれど、夕日を拝む人はない」という歌詞がある。300年前に山本常朝が、「人の心を見ようとしたら患え」という言葉がある。自分が不幸になったときに、はじめて他人の心がわかるものである」(1-94)といったことが、今も鹿児島で民謡として歌い継がれていることは面白いことである。

### (3) 事前準備

「直茂公御壁書二十一箇条」の第12条に「大事の思案は軽くすべし」とある。すなわち「大事な事については、普段から検討を加えておけば、その事案に直面した時、簡単な検討で処理できる」ということである。これを受けて、山本常朝は、「事に当たる前に予め対処方法を検討しておく者を“覚の士”といい、その場に当たって都度対処する者を“不覚の士”」(1-21)と定義している。

『葉隠』聞書第一の18には、①翌日のことは、前の晩から書き付けておくこと、②約束があつて出かける時は、前夜から相手方のことを調べ、挨拶・話題などを十分に考えておくこと、③屋敷へ訪問するときには、主人のことをよく調べてからいくこと、④偉い人に呼ばれたら、有難いことだ、何か有意義なことがあるだろうと思つていくこと、

⑤座の持ち方などは、普段から心得ておくこと、⑥酒席は、座を立つ潮時を考えること。早くても遅くてもよくないなど具体的なことが列挙されている。

湛然和尚は、「風鈴の音で風を知り、火の用心をした」、「枕元に火鉢・行燈・附木を置いて、緊急時にはすぐ行燈をつけることができる準備をしていた」(2-73)という。

主人のお供をして外泊するときには、①本陣や旅籠の裏道・便所などを確認すること、②火事の避難経路を考えておくこと、③家屋の造り・壁・天井・床・障子・縁側・畳・床の間などを調べておくこと(11-152)などが記載されている。

営業マンが得意先を訪問するときには、訪問の目的の明確化、訪問時間の厳守、応接間での前振りの話題、相手方の趣味等を事前に整理しておき、夜の接待時には座の持ち方に十分気を使うことなどは、営業マンの基本的な心得である。また出張時のホテル到着後のチェック行動は、昔も今も変わっていないことがわかる。

### (4) 悪口

鍋島直茂は、お伽衆に「他人の悪口をいっけはいけない」と注意し、鍋島光茂は、「何某はまだ来ないか」と聞いた時、「まだ来ておりません」と答えた家来に“お前は、仲間を陥れるつもりか。見て参りますと言え”と怒った」(5-11)という。このように佐賀藩のトップが、讒人を嫌ったということは、藩内挙つて他人の悪口を言う者を嫌っていたことが窺われる。

そのほか「少し知恵のある奴は、世間を批判しがちである。口を慎む者は、善世には用いられ、悪世には刑罰を免れるものである」(1-135)という言をはじめとして、「科人を悪く言わないこと」(1-192)、「中野将監が切腹した時、将監の悪口を言っていた者達に対して大木兵部は、死んだ人の悪口をいっけはいけない。切腹を命じられても死後に善い人であったといえ、20年後には忠臣になっている」(1-199)など、他人の悪口はもちろ

ん、故人の悪口までも慎まねばならないと戒めている項目がある。

### (5) 衆の知恵

『六韜』「文韜」大禮第四に「目は、明を貴び、耳は、聰を貴び、心は、知を貴ぶ。天下の目を以て視れば、見えざる無きなり。天下の耳を以て聴けば、聞えざるなきなり。天下の心を以て慮れば、知らざるなきなり」とある。<sup>1</sup>すなわち君主一人で、視・聴・知の能力を発揮するもよいが、万民の目・耳・心を収斂すれば、何事も見通すことができるということである。

「自分の僅かな知恵だけで考えるのではなく、知恵ある人に相談するのがよい」(1-5)、「古人の智慧や行いを参考にし、他人に相談すれば、悪いことは起らない。勝茂公は、判断に迷ったときは、父・直茂公ならば、どのようにするかを考えた」(1-6) という。

佐賀藩随一の学者である石田一鼎は、「良い手本を真似て文字を学べば、悪筆も上手になる。同じように良い家来を手本にすれば、良い家来となる。しかし今時良い家来がない。そこで、時宜作法は何某、勇氣は何某、身持ち正しき事は何某、決断力は何某など長所を持った者を撰び手本とすればよい」(1-64) といっている。

山本常朝は、「凡人は、自分の考えで事を処理しようとするから、凡庸の域を脱せないのである。人を超えようと思うならば、優れた人、知恵ある人の考えを聞くことである」(1-138、2-46) といっている。

主観を離れ、客観的に物事を判断するためには、古人の言行に学ぶこと、優れた人に相談することなど、独断を戒め、衆の知恵の利用することが大切である。

### (6) 風体・態度

山本常朝は、「奉公人は、風体で評判がよくなるものである。その風体の根本は、その時々状況に合っていること」(2-43) であるとし、「自分

の姿や形、態度が立派であるようにするためには、常に鏡を見て直すことである」(1-89、1-108) といっている。具体的には「徳ある人は、常にゆったりとしているが、小人は、いつもぼたぼたしている」(2-104)、「物事を少し知っている者は、すぐ知ったかぶりをする。よく知っている者は、知ったかぶりをしないものである」(2-109)、「常に頬紅を持参し、酔い覚め時や寝起きで顔色が悪いときは、紅粉で化粧するのがよい」(2-66) など現在でも通用しそうなことが記載されている。

道歌に「知らぬ道、知った振りして迷うより、聞いて行くのが、ほんの近道」とある。

### (7) 性格

「人と出会ったときには、素早くその人の性格を把握し、それに応じた対応をとるべきである」(2-4) とし、さらに『論語』述而第七の暴虎馮河を引用し、「どこに淵や瀬があるかを確かめないで川を渡ると、対岸へ着く前に溺れて死んでしまう」<sup>2</sup>から「時代の風俗、上司の好き嫌いを理解して勤めることが大切である」(2-8) といっている。サラリーマン必須の知識である。

### (8) その他

#### ①節酒

「大酒で後れを取った人が多い」(1-68) から「注意しなければならないことは大酒である」(2-1) とし、「酒が過ぎると必ず思いがけないことが起こるので、正体がなくなるまで飲まないようにすることが大切である」(8-2) と戒めている。

#### ②締め仕方

「宴会は、締めの仕方が大事である。客が帰る時分には、いつも名残尽きない心持にさせることが重要である」(2-29)、「上方には花見用の簡易重箱がある。終わったら踏み潰して帰る。何事も終わり方が大事である」(2-38) など、締めの大切さを力説している。「終わり良ければ、全てよし」という諺のとおりである。

### ③他人の忠告

聞書第一の154に「世の中には教訓をする人は多く、教訓をされて喜ぶ人は少ない。ましてや教訓に従う人は稀である。道理を弁えた人に近づき、いつも教訓を受けることが大切である」とある。人間、他人から忠告されなくなったら終わりである。

## II. 子育て論

『葉隠』に記載されている子育て論は、①藩主の子育て論、②山本神右衛門重澄（常朝の父）の子育て論、③武士の一般的子育て論に分類することが出来る。

### 1. 藩主の子育て論

『葉隠』には藩主の子育てに関する記載が少ない。これは、山本常朝の中級武士という地位では、直接見聞きする機会が少なかったからであろう。

#### (1) 民の苦勞

「直茂公御壁書二十一箇条」の第21条に、「人は、下程骨折り候事、能く知るべし」とある。すなわち上に立つ者は、下の者ほど苦勞していることを、よく知っていなければならないという意味である。聞書第4の40に、「甲斐守（五男・直澄）が、山城守（八男・直弘）経由で十間堀の掃除を勝茂公に申し上げたところ、わしも行くといった。その日二人が橋の上であれこれ指示しているのを見て、勝茂公が“お前も堀に入って掃除しろ”と命じた。これを言うために見物に来たのだ」といったとある。二人に民の苦勞を、身をもって体験させたのであろう。

#### (2) 注意の仕方

##### ①直接的話法

佐賀城の普請が終わったので、勝茂公が直茂公を案内し説明した。直茂公が「勝茂よ、お前は切腹する場所を忘れてはいないか」（3-8）といったという。武士は、いつ切腹するか分からないので、

普段からそれを考慮に置いて置くべきであると直接的に戒めたのである。

直茂公が元茂（勝茂の庶長子・小城藩主）に、「身分の上下を問わず時が来れば、家は、亡びるものである。その時亡ぼすまいとすると恥を晒して亡びる。いよいよのときは、亡びる覚悟を決めて対処しろ。さすれば立ち直る術が見つかるかもしれない」（3-27）といったという。

二代藩主・光茂公が息子・綱茂を江戸から佐賀へはじめて連れて来たとき、百姓が道の両側で拝んでいた。光茂公は「自分は、人から拝まれる地位にあるなどと思つてはいけない」（5-30）と厳しく注意したという。

勝茂公は、直澄が三神社参詣で元旦の挨拶が遅れたことについて、「私には両親がおらず、将軍様は江戸におり、上に対する礼儀に欠けるので、元旦に三神社へ参詣する。お前は、俺に挨拶すればそれで良いのだ」（4-36）と、神社参詣より自分の親への挨拶が先であることを教えた。

##### ②間接的話法

鍋島茂賢（直茂の養子・石井茂里の実弟）がハトを射損じて腹を立て、鹿子天神目がけて鉄砲を放ったことを聞いた直茂が、天神へ参詣し平伏して、茂賢の不敬を詫びたという（3-40）。

勝茂公が鷹狩に行ったとき、「これより甲斐守の領地」という高札をみて抜き取り、城の式台に立てかけておいた。それを見た直澄は、勝茂公に許しを請うた（4-39）。

どちらも直接本人にはいわず、間接的に叱咤するやり方で、厳しい叱り方である。

### 2. 山本神右衛門重澄の子育て論

山本常朝の父、山本神右衛門重澄は、14歳で勝茂に召され、中野久太郎（権之丞）と称し、大阪の陣（多久圖書の組）、大阪城普請（二百人頭）、島原の乱（原城攻めで負傷）を経験した。山本重澄は、「若い者は、詩歌や小説を読んだり、囲碁将棋をしてはならない。書物を見るのは、公家の役目であり、中野一門の役目は、檜の木の手柄を握っ

て、武勇を顕すことである」(1-60、11-42)といっている。

しかし松田修によれば、「文禄慶長の役で有名を馳せた山本清明（山本常朝の祖父）は、慶長19年（1614）から元和6年（1620）まで、収支取税を任とする伊万里代官を任じられた。また寛永12年（1635）正月17日には、山本重澄が清明の伊万里代官職を引き継ぎ、併せて有田川古郷の新田開発任務を命じられた。重澄は、有田陶器の質的・量的向上と有田地区の新田開発に尽力し、佐賀藩の財政逼迫の緩和に大きく貢献した」という<sup>3</sup>。山本家は、文官としても活躍した家である。

以下、山本重澄の子育て論を聞書第十一の42、「山本前神右衛門教訓の事」を中心として、その他の項目と合せて整理してみたい。

### (1) 山本前神右衛門教訓の事

①若い者達は、詩・小説・囲碁などを讀んだり、したりしてはならない。我々中野一門の役目は、櫛木の柄を握って武勇を顕すことである。

\* 書物を読むのは、公家の仕事であり、中野一門の仕事ではないといって、書物を読むとすぐ焼き捨てられた（1-60）という。

②何事も一生懸命にやればやれない事はない。

③どんなに苦しくても、それを表に出してはいけない。

\* 土は食はねども空楊枝、内は犬の皮、外は虎の皮（1-60）。

④相手に対する敬意の言葉で、筆がすり減ることはなく、丁重に頭を下げてても、腰が折れることはない。

⑤焼き鳥にも紐をつけておかないと、逃げることもある。念には念をいれよ。

⑥走っている馬にも鞭をあてろ。念には念を入れよ。

⑦面と向かって話す人は、悪意のない人である。

\* 人と話す時は、相手の目を見ながら話せ（1-60）。

⑧人は一代で終わるが、名は末代まで残る。名を大事にしなさい。

⑨金銀は求めれば手に入るが、人材は求めてもいないものである。人材を大切にしなさい。

⑩作り笑いをする者は、男なら臆病者、女なら尻軽である。作り笑いはするな。

⑪一町を歩く間に、七度嘘をつけるのが男である。

⑫知っていて、質問をするのが礼であり、知らないで、質問をするのが法である。

⑬一つのことを会得すれば、色々なことが理解できる。

⑭一を知って万を悟る。

⑮志は、松の葉に包め。志があれば贈り物は、簡単でもよい<sup>4</sup>。

⑯頼もしい者は、剛勇の者である。

⑰袴の中に手を入れるな。危急の時に刀を抜くことができない。

⑱人前で欠伸をしてはならない。どうしても出てしまう場合には、口に扇子を当てるか、袖で隠して欠伸をしなさい。

⑲足元に注意しなさい。

⑳死に際に呻き声を立てるな。

300年を経た現在でも使いこなされている格言があることに注目しておきたい。

### (2) 山本重澄の幼児教育

父・重澄は、常朝が幼い時、①唐人町に行かせた、②5歳から父名代として各所に行かせた、③7歳から体を鍛えるために、武者草履を履かせて先祖の墓参りをさせたという（2-93）。父親が社会教育の一環として課したものであろう。

## 3. 武士の一般的子育て論

### (1) 幼児教育

聞書第一の85に、「武士の子供は、育て様あるべき事なり」として、以下8項目を羅列している。

①幼少時から勇気を推奨すること。

②幼少時に、脅したり騙したりしてはならない。

③幼少時に臆病になることは一生の不覚である。

親が雷に怖気づかせたり、暗がりに連れて行ったり、泣くのを止めさせようとして、怖い話を

することはよくない。

- ④幼少時に、強く叱ると内気になる。
- ⑤悪い癖が身に付かないようにすること。身に付いてしまったからは治らない。
- ⑥ものの言い方や礼儀作法は、徐々に教えること。
- ⑦夫婦仲が悪い家庭の子は、不幸な子である。
- ⑧愚かな母親は、父親の意見に反対して子供を最良するため、子供が父親と不和になる。

貝原益軒が1710年に書いた日本最初の教育書といわれる『和俗童子訓』には、「幼児のころは、何色にも染まっていない白紙である。子ども自身が周囲を真似て、見習い・聞き習いすることで、次第に“こころのあるじ”が形成される。もし“悪しきあるじ”が住み込むと、いかに教えても、もはや善を移すことはできない」と書かれている。貝原益軒は、300年前にすでに幼児教育の大切さを説いているのである。同時期の『葉隠』の幼児教育においても「脅し・賺し・叱り教育」で“悪しき心の主”が住み込まないようにすべきであると注意している。

## (2) 男女の育て方

聞書第十一の163に、男子と女子の育て方が具体的に記載されている。

- ①男子の育て方は、勇気を奨め、親を主君と準えて普段から礼儀作法・給仕・口上・堪忍・道の歩き方まで習わせるようにするのがよい。一生懸命やらない場合には、一日食事を与えないことである。
- ②女子の育て方は、貞節を第一に教え、男子とは六尺の間に居合わせず、目を見合わせず、直接物を受け取らず、物見遊山や寺参りなどはさせないようにすること。家庭で厳しくすれば、嫁に行ったときに楽である。

女子教育については、『礼記』内則第12に「七年にして、男女席を同じくせず、食を共にせず」とある<sup>5</sup>。まさに『礼記』の教えそのままである。

## (3) 早起きの奨励

聞書第一の60に、「朝は四時に起き、毎日行水をし、髪を整え、日の出の頃には食事をし、日が暮れたら、寝るのがよい」と毎日の予定を定めている。聞書第十一の165に、「早起が一番善いことである」とし、「鶏鳴既に鳴いて忠臣朝を待つ」<sup>6</sup>をはじめとし、「子（0時）に伏し、寅（4時）に起きよ」、「忠臣星に順ふ」、「一日の計は鶏鳴にあり」など、いろいろと古語を引用して早起きを奨励している。

『鎌田正純日記』<sup>7</sup>天保9年8月22日の条によれば、江戸中期の薩摩藩の朝出勤務は、「明け六ツ（午前六時）から四ツ（午前十時）」であった。佐賀藩の勤務体系は、資料が見つからず未調査であるが、薩摩藩と同様とするならば、朝四時には起床しないと遅刻であろうから、朝四時起床は、当然のことと思われる。

また北条早雲の『北条早雲二十一箇条』の第3条によれば、「夜は五ツ（午後8時）以前には寝ること。（中略）古語には、子に伏し、寅に起きよとあるが、それは、人によりけりであろう。しかし朝起きは利益のあることである」<sup>8</sup>とあり、“遅寝早起き”が必ずしも奨励されていないことに興味が引かれる。

## Ⅲ. 道徳教育論

『葉隠』には、道徳論的な逸話が多くみられる。特に対人関係論の中の礼儀作法には、道徳論的要素が多く含まれるが、家庭教育論から対人関係論、子育て論を筆者の感覚で抽出し、残った部分を道徳教育論とし、「一念発起」、「日々是精進」、「この瞬間を大切に」、「過ちては則ち、改むるに憚ること勿れ」、「奢りと自慢に注意」、「老兵は、消えるのみ」 「道の極意」に整理した。

### 1. 一念発起

『新約聖書』マタイ伝には、「求めよ、さらば与えられん」という有名な言葉がある。『書経』太甲下篇には、「慮らずんば、胡ぞ獲ん。為さずん

ば、胡ぞ成らん」とあり<sup>9</sup>、『華嚴経』第12、梵行品には「無限向上の志を立つるとき、真に正覚を成就して万有の真相を知る」<sup>10</sup>、すなわち新たに悟りを得ようとする心を起こす時、直ちに仏の正しい悟りを得るという言葉がある。武田信玄は、「為せば成る、為せねば成らぬ、成る業を、成らぬと捨つる、人の儂さ」といい、米沢藩主・上杉鷹山は、「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の、為さぬなりけり」と詠った。内外を問わず、「まず行動」あるいは「一念発起」という精神があることは興味深い。

『葉隠』にも、同様の思想は内在している。聞書第一の103に石田一鼎の話として、「何事も願ひさえすれば叶うものである。願ったから松茸も今は北山で採れる。将来はヒノキが採れるようにしたい」とあり、「名人も人の子、我も人の子、名人に及ばない事などないと思って取り組み」(1-117)と檄している。

山本常朝は、「何事も成らぬということはない。一念発起すれば天地をも貫き通すことができる」(1-144)といい、また「人から頭を踏まれてぐずぐずとして一生を終えるのは口惜しいことである。上の人をみて、“彼も人の子である。彼を乗り越えられないことはない”と思って頑張れ」(11-142)ともいっている。現代サラリーマン向けにふさわしい一言といっても過言ではないであろう。

## 2. 日々是精進

聞書第一の45に、「下位の者は、自分の未熟さを知り、他人の未熟さも知る。中位の者は、自分の不足な所が目につき、他人の不足な所も目につく。上位者は、全てを会得して自慢の心が芽生え、人が褒めて呉れることを悦び、他人の未熟さを歎くという。実はこの上に一段と高い位がある。この位は、どこまで行っても終りのない道である。一生これで十分だという思いがなく、自慢も、卑下する心もない。柳生殿は“人に勝つ道は知らず、己に勝つ道を知りたり”といったそうだと、ある剣術者の言を記している。「修行の道で一家を

なしたと思って満足してしまつてはいけない。修行は、一生止めてはならない。いつも“まだ不足だ、まだ不足だ”と考えて、一生探求していくべきである」(1-59、1-139)。まさに人生はすべて、日々これ精進である。

## 3. この瞬間を大切に

山本常朝は、「今のこの瞬間より外はなく、この瞬間、瞬間を重ねて一生となるのであるから、この一瞬を大切に過ごすべきである」(2-17)といっている。

同様な表現は、「その日、その日を最後と思つて」(1-157)、「瞬間、瞬間を大事にして」(2-20)、「その時代、その時代をよくすることが大切」(2-18)、「今日一日限り、明日になったらまた今日一日限りと思えばよい」(8-20)などがあり、機会あるごとに瞬間の大切さを説いている。

## 4. 過ちては則ち、改むるに憚ること勿れ

聞書第一の47に、美作守殿(多久茂辰)・石田一鼎など学問仲間と学問の話をした時、宗龍寺の江南和尚が、「各々は、物知りで結構なことだ。しかし道を知るということでは、普通の人より劣っている」といった。一鼎が「聖賢の言つたこと以外に道はないだろう」といった。すると和尚が「物知りと言われる人が、道をしらないことは、東に行くはずの者が西へ行くようなものである。物を知る程、道から遠ざかっていく。その訳は、古の聖賢の言行を書物で覚え、話で聞き覚えて、見識が高くなり、自分も聖賢であるかの様に錯覚して、一般の人を虫けらのように見下すからである。聖の字をヒジリと読むのは、非を知っているからである。私は、知非便捨の四字をもって我が道を成就すると説いた」とある。

聞書第一の90では、単刀直入に『論語』学而第一の「過ちては則ち、改むるに憚ること勿れ」を引用し<sup>11</sup>、「過ちを犯したときには、躊躇なく改める」といっている。また「若いときに残念記と名付けて、一日の過ちを記入したら、毎日20~30も



あったので書くのをやめた。現在でも寢床で一日の反省をすると過ちのない日はない。難しいものだ(1-173)と嘆息している。「慚愧懺悔ざんきざんげというのは、水を地面にこぼすようなもので、罪もすぐに悔い改めれば、罪の跡形はすぐに消えていくものである」(2-87)と比喩的に解説している。これから推すると、山本常朝も「慚愧懺悔」の毎日であったのであろう。

## 5. 奢りと自慢に注意

山本常朝は、「少しものの道理を知った者は、やがて高慢になり、自分は今の時代には惜しい人材だと思えるようになる。そういう人には天罰が当たる」(1-123)といい、また「学問は、よいことであるが、大方見識が高くなり、理論好きになるから心しなければならぬ」(1-72)と江南和尚の戒めを例にあげ、「順調なときには、奢りと自慢に気をつけよう」(1-175、1-201)と注意している。

## 6. 老兵は、消えるのみ

家臣が、90歳を超える老人を、鍋島直茂に会わせようとしたとき、「90餘歳まで長生きした老人は、何人もの子や孫と死別しているはずであるから、本人にとってめでたいことではないであろう」(3-22)とあって、その老人とは会わなかったそうである。

山本常朝は、「四十までは、強がるのがよい。しかし五十になったらおとなしくするのがよい」(1-149)といい、「人が老いばれると、本来の性質が現れる。六十になって老耄らうしない人はいない。老耄らうしないと思うこと自体が老耄らうである」(1-168)と語っている。まさに老兵は、消えるのみである。

## 7. 道の極意

「古い茶器は、徳が備わっているから、身分の高い人もそれを好むのである。下位から出世した者が尊敬されるのも、茶器同様徳があるからである」(2-92)とし、人間の徳とは、「その人の謙虚

さ、落ち着き、寡黙、礼儀作法、眼光などに現れるものである」(2-89)と定義し、「外に向かつては、身に覚えがないというが、自分の心が問いかけて来たときに、“いかに答へむ”となる。これがすべての道の極意ともいうべきものである」(2-133)と『後選和歌集』にある「なき名ぞと、人には言ひてありぬべし、心の問はば、いかが答へむ」という歌を引用し<sup>12</sup>、全ての道の極意とは何かを説明している。

## IV. 最後に

『葉隠』が完成したのは、1716年。徳川幕府も創設以来100年を経て、武断政治から文治政治へと移行し、元禄文化が開花し、井原西鶴(1642-1693)・近松門左衛門(1653-1725)の小説が一世を風靡した時代であった。

『葉隠』では「夜陰の閑談」において、「鍋島の家来は、国学(藩の歴史・伝統)について勉強しなくてはならない。なぜならば、主家の成り立ち・ご先祖様の苦勞・お慈悲によって御家が長く繁栄していることを理解するためである。釈迦も孔子も楠木も信玄も、一度も龍造寺・鍋島家に仕えたことがないので、当家の家風に合わない。だから平時であれ、戦時であれ、ご先祖様を崇拜しその教訓を学べば、余所のことを学ぶ必要はない。しかし国学を身につけた上で、慰みとして余所の学問を勉強することはよいことである」といい、ここでは「四書五経の必要性」が微塵も出て来ないのである。

朝鮮出兵・関ヶ原などを経験した初代藩主・勝茂と江戸生まれの江戸育ちで戦乱を全く知らない二代藩主・光茂の思想の違いを端的に顕した逸話がある。光茂が歌学に没頭していることを聞いた勝茂が、「歌は、公家の遊びであって、武家には用はない。国を相続する者は、ただ武道と政治だけを心がければよい」とあって、歌書を焼き捨て、歌書は二度と見ないという誓書を書かせ、御側家老二人を首にした。光茂は、「自分も乱世に生れていれば、父に負けず武勇の者となれたが、平和

な今の時代に名を残せるのは、歌学の奥義を極めて日本一になることである。政治に差障りがなければ、歌学をやっても父は許してくれるであろう。しかしお叱りを受けた手前、父には内緒でやろう」(5-19) といって歌学の勉強もした。

大道寺友山(1639-1730)が福井藩主・松平吉邦に召し抱えられた正徳4年(1714)以降の作品である『武道初心集』には、「武士は、農工商の上に立つ身分なので、学問に励んで広く物事の道理を弁えていなければならない。乱世の武士は、十五、六歳になれば初陣で一騎役を務める必要があったので、十二、三歳になれば馬に乗り、槍を使い、弓を射、鉄砲を放ち、武芸に修練していなければならない。」しかし現在のような平和な時代には、「十歳頃から四書五経を習わせ、物事を書き覚えるようにと教育し、十五、六歳で体が出来た頃から、武芸一般を修練させることが武士の子育ての本意である」と学問の重要性が書かれている<sup>13</sup>。

福岡藩主・黒田長政(1568-1623)は、元和8年(1622)九月に作成した「掟書之事」において、「藩主が文を好むということは、単に書を多く読むこと、詩を作ること、故事来歴を記憶することではなく、正しい道を理解すること、吟味工夫をすること、筋道を間違えないこと、過ちを犯さないこと、賞罰をはっきりすること。憐れみ深いことなどのためである」といっている<sup>14</sup>。

同時代の『葉隠』・『武道初心集』・『掟書之事』の三書を比較すると、佐賀藩だけが学問不要論者のように感じられるが、必ずしもそうではない。

すなわち、徳川綱吉が、元禄3年(1690)年に林家の屋敷内にあった聖堂を湯島に移し、翌年林鳳岡を大学頭に任じ、また江戸城内で諸大名を集めて講義をするなど、学問の振興を図った。その影響は、諸藩におよび、聖堂を中心とした藩校創設がなされた<sup>15</sup>。佐賀藩における教育施設の最も早いものは、元禄4年(1651)二代藩主・光茂の二の丸聖堂があり、これを三代藩主・綱茂が元禄10年(1657)に城外の鬼丸の観願荘に移し、鬼丸

聖堂と称した。宝永5年(1708)實松玄琳が<sup>せきさきい</sup>積菜を主宰し、元屋敷講習堂を聖堂内に移し、藩士の教育にあたり、その子孫がこれを継承した<sup>16</sup>とあるように、二代藩主・光茂の時代になると。藩校が創設され藩士の教育がはじまっている。これらを見ても、佐賀藩が学問不要論者であったということは間違いであることが明白である。これら三書の比較研究については、紙面の関係もあり、稿を改めて詳述したいと思う。

## 註

- 『六韜』「文韜」大禮第四  
文王曰、主明如何、太公曰、目貴明、耳貴聰、心貴智、以天下之目視、則無不見也、以天下之耳聽、則無不聞也、以天下之心慮、則無不知也、
- 『論語』述而第七  
子曰、暴虎馮河、死而無悔者、吾不與也
- 福岡女子大・香椎鴻第13号1967年10~11頁
- 現代でも「寸志」を「松の葉」と書く習慣が残っている。筆者注
- 『礼記』内則第十二  
七年、男女不同席、不共食、
- 藤原定家『和漢朗詠集』鶯63  
「鶏既鳴兮忠臣待旦、鶯未出兮遺賢在谷」
- 『鎌田正純日記』鹿児島県、1989年
- 吉田豊編訳『武家の家訓』徳間書店昭和53年、144頁
- 『書経』太甲下 第七  
嗚呼、弗慮胡獲、弗爲胡成
- 国立国会図書館デジタルコレクション『華嚴経』第十二、発心と真証(梵行品)
- 『論語』学而第一  
過則勿憚改
- 『後選和歌集』卷十一、恋三
- 古川哲史校訂『武道初心集』岩波書店2008年、33-34頁
- 同文館編集部編『日本教育文庫』同文館明治43年、373頁

- 15 沖田行司『藩校・私塾の思想と教育』日本武道館、平成23年142頁
- 16 佐賀県史編さん委員会『佐賀県史中巻』昭和49年名著出版399-400頁